

社会集団に対するイメージ:ステレオタイプ内容モデルの検討¹⁾

Images of social groups and social categories: An examination on stereotype content model

佐久間 勲*
Isao SAKUMA

要旨: 本研究の目的は、日本人大学生を対象にステレオタイプ内容モデル (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002) が適用可能であるかを検討することであった。研究1では大学生178名、研究2では大学生100名に対して、6組の形容詞対を用いて、複数の社会集団に対するイメージを回答してもらった。加えて、それらの社会集団と自分が含まれていると考えられる集団のどちらが地位が高いか、それらの社会集団と自分が含まれていると考えられる集団との関係が協力的であるか競争的であるかについても回答してもらった。その結果、研究1では「知的能力が高いけれども冷たい」、研究2では「知的能力は高いけれども冷たい」「あたたかいけれども知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプを持たれている集団があることが明らかになった。さらに相関分析の結果、地位が高い外集団に対しては知的能力が高い、協力的な関係にある外集団に対してはあたたかいというイメージを持っていることが明らかになった。これらの結果は、ステレオタイプ内容モデルの予測とほぼ一致するものであった。

キーワード: ステレオタイプ、両面価値的ステレオタイプ、ステレオタイプ内容モデル

1. 問題

本研究の目的は、日本人大学生を対象にステレオタイプ内容モデル (stereotype content model; 以下、SCM, (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)) が適用可能であるかを検討することである。

これまでに多くのステレオタイプに関するモデルが提唱されてきた。それらの多くは、ステレオタイプの内容にかかわらず、その形成、維持、適用などの過程を説明するものであった。それに対して本研究で取り上げる SCM は、ステレオタイプの内容や、その内容が社会構造的要因によって規定されることを説明するモデルである (レビューとしては、Cuddy, Fiske, & Glick (2008) がある)。

* さくま いさお 文教大学情報学部

SCMの概要は次の通りである。第一に、ステレオタイプはあたたかさ(warmth)と知的能力(competence)の2次元から構造化されている。第二に、多くのステレオタイプは一方の次元の評価が高く、他方の次元の評価が低い両面価値的(相補的)な内容になっている。具体的には、多くのステレオタイプは「知的能力は高いけれども冷たい」、もしくは「あたたかいけれども知的能力が低い」という内容になっている。第三に、集団間関係がステレオタイプの内容を規定している。具体的には、内集団よりも地位が高いと認知する外集団に対しては知的能力が高い、地位が低いと認知する外集団に対しては知的能力が低いというイメージを持ち、内集団と協力的な関係にあると認知する外集団に対してはあたたかい、競争的な関係にあると認知する外集団に対しては冷たいというイメージを持つという。

SCMに関しては、モデルの提唱者であるFiskeらの一連の研究により、その妥当性が検証されている。たとえば、Fiske et al. (2002)はSCMに基づき、複数の社会集団に対するステレオタイプを検討している。その結果、高齢者、主婦、知的障害者などに対しては「あたたかいけれども知的能力が低い」、女性実業家、富裕者などに対しては「知的能力は高いけれども冷たい」というステレオタイプを持っていること、地位が高いと認知する外集団ほど知的能力が高い、内集団と協力的であると認知する外集団ほどあたたかいというイメージを持つことを明らかにしている。さらにSCMが文化にかかわらず適用可能であるかという点に関する検討も行われている。Cuddy et al. (2009)は、日本を含む10カ国のサンプルを対象に調査を実施した。そして、いずれのサンプルでも、おおむねSCMが適用可能であることを示唆する結果を得ている。

日本においてもSCMや両面価値的ステレオタイプに関する研究が実施されている。ただしこれらの研究の多くは、性別(沼崎, 2010; 高林, 2007)、障害者(栗田・楠見, 2012)、大学(池上, 2008)のように、ある特定の社会集団の両面価値的ステレオタイプを扱っている。つまりFiske et al. (2002)やCuddy et al. (2009)のように、さまざまな社会集団に対するステレオタイプが両面価値的な内容になっているか、集団間関係がステレオタイプの内容を規定しているかという点に関して包括的に検討している研究はほとんど実施されていない。

そこで本研究ではFiskeらの一連の研究を参考に、日本人大学生を対象に、SCMが適用可能であるか検討する。具体的には、あたたかさと知的能力の2次元から複数の社会集団に対するイメージを検討する。そして日本人大学生においても両面価値的ステレオタイプが存在するか検討することを第一の目的とする。なお本研究で取り上げる社会集団の一部はFiske et al. (2002)で対象となったものと同じであるが、それらに加えて日本においてしばしば話題となることが多い社会集団(社会的カテゴリー)として、フリーター、ニート、引きこもりなどを取り上げる。さらに集団間関係がステレオタイプの内容を規定するという点に関して検討する。具体的には、内集団よりも地位が高いと認知する外集団に対して知的能力が高い、内集団との関係が協力的であると認知する外集団ほどあたたかいというイメージを持つか検討することを第二の目的とする。

2. 研究1

(1) 目的

研究1の目的は、日本人大学生を対象にSCMが適用可能であるかを実証的に検討することである。

(2) 方法

調査対象者 一橋大学で心理学を受講している大学生178名（男性124名、女性54名）を対象に質問紙調査を実施した²⁾。

実施時期 2008年7月に実施した。

質問項目 質問紙には以下の質問項目が含まれていた。①社会集団に対するイメージ：調査対象者は6組の形容詞対（7件法）を用いて、10の社会集団に対するイメージを回答した。6組の形容詞対は、村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林（2005）で用いられたものを使用した。形容詞対の半数はあたたかさ（「親しみやすい—親しみにくい」「冷たい—暖かい」「好き—嫌い」）、半数は知的能力（「頭がよい—頭が悪い」「有能でない—有能である」「知的な—知的でない」）に関するものであった。なお質問紙には2種類（A、B）あり、対象となる社会集団の一部が異なっていた。10の社会集団のうち「高齢者」「富裕者」「貧困者」「キャリアウーマン」「主婦」の5つの社会集団に対するイメージは全員が回答した。残りの5つの社会集団については、2つのパターン（A：「役人」「ニート」「知的障害者」「会社経営者」「引きこもり」、B：「政治家」「フリーター」「身体障害者」「グラビアアイドル」「ホームレス」）を用意した³⁾。調査対象者はランダムに配布されたAまたはBの質問紙に回答した。加えてイメージの回答順序の効果を相殺するために、それぞれの種類の中で回答順序を2種類用意した。②相対的地位の認知：①でイメージを回答した10の社会集団と対象者自身が含まれていると考えられる社会集団を比較したときの相対的な地位の高さを回答した（5件法）。③協力—競争関係の認知：①でイメージを回答した10の社会集団と対象者自身が含まれていると考えられる社会集団がどの程度、協力的または競争的であるかを回答した（5件法）。

手続き 授業時間の一部を使用して実施した。調査対象者には質問紙への回答に対して授業の成績に加点されることを説明した。回答時間は約10分であった。

(3) 結果

2次元から見た社会集団のイメージ 社会集団ごとに、個人の回答を分析の単位として、あたたかさと知的能力に関連する形容詞対の平均値を算出し、それぞれをあたたかさ得点、知的能力得点とした。加えて、それぞれの社会集団に対する相対的地位の認知、協力—競争関係の認知の平均値を算出した。その結果を表1に示した。

表1 あたたかさ得点、知的能力得点、相対的地位の認知、協力—競争関係の認知の平均値（標準偏差）

	あたたかさ 得点	t 検定	知的能力得点	t 検定	相対的地位	t 検定	協力—競争関係	t 検定
富裕者 ^{AB}	3.53 (0.75)	***	4.43 (0.86)	***	3.95 (0.85)	***	2.75 (0.85)	***
キャリアウーマン ^{AB}	3.60 (0.72)	***	5.16 (0.99)	***	3.78 (0.85)	***	2.89 (0.87)	+
政治家 ^B	2.80 (0.93)	***	4.25 (1.30)	+	4.26 (0.85)	***	2.83 (0.78)	*
役人 ^A	2.97 (0.95)	***	4.48 (1.14)	***	3.89 (0.77)	***	2.66 (1.00)	**
会社経営者 ^A	3.78 (0.86)	*	5.25 (1.11)	***	3.99 (0.89)	***	2.75 (1.00)	*
高齢者 ^{AB}	4.58 (0.94)	***	4.00 (0.75)		3.19 (1.04)	*	3.34 (0.95)	***
主婦 ^{AB}	4.71 (0.78)	***	4.01 (0.73)		2.99 (0.82)		3.59 (0.80)	***
グラビアアイドル ^B	4.13 (1.05)		3.06 (0.96)	***	2.70 (1.02)	**	3.19 (0.74)	*
身体障害者 ^B	3.93 (0.69)		3.84 (0.70)	*	2.58 (0.75)	***	3.18 (0.52)	**
知的障害者 ^A	3.75 (0.72)	**	3.31 (0.96)	***	2.44 (0.85)	***	3.21 (0.80)	*
貧困者 ^{AB}	3.98 (0.73)		3.48 (0.78)	***	2.14 (0.75)	***	2.92 (0.81)	
フリーター ^B	3.73 (0.81)	**	3.08 (0.93)	***	2.11 (0.81)	***	3.00 (0.71)	
ホームレス ^B	3.22 (0.81)	***	3.25 (0.85)	***	1.84 (0.80)	***	3.03 (0.61)	
ニート ^A	3.28 (1.03)	***	2.90 (1.14)	***	1.83 (0.81)	***	2.95 (0.79)	
引きこもり ^A	2.84 (1.11)	***	3.22 (1.17)	***	1.94 (0.83)	***	2.96 (0.77)	

注1) あたたかさ得点、知的能力得点の範囲は1～7。得点が高いほど対象集団に対してあたたかい、知的能力得点が高いというイメージを持っていることを意味する。相対的地位の認知と協力—競争関係の認知の得点の範囲は1～5。得点が高いほど自分が含まれる集団よりも対象集団の方が地位が高い、自分が含まれる集団と対象集団との関係が協力的であると認知していることを意味する。

注2) 社会集団の脇に記してある記号は、社会集団が判断の対象として含まれていた質問紙のパターン。

注3) t検定は理論的中点からの差の有意性の検定。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$ 。

これらの社会集団に対するイメージが明確であるかを検討するために、理論的中点（4点）とそれぞれの社会集団のあたたかさ得点、知的能力得点の平均値の差についてt検定を実施した⁴⁾。その結果、あたたかさ得点については、高齢者、主婦の平均値は理論的中点と比較して有意に高かった（ $t_s > 8.28$, $p_s < .001$ ）。他方、富裕者、キャリアウーマン、政治家、役人、会社経営者、知的障害者、フリーター、ホームレス、ニート、引きこもりの平均値は理論的中点と比較して有意に低かった（ $t_s > 2.46$, $p_s < .05$ ）。知的能力得点については、富裕者、キャリアウーマン、政治家、役人、会社経営者の平均値は理論的中点と比較して有意に高い、または高い傾向が見られた（ $t_s > 1.81$, $p_s < .10$ ）。他方、グラビアアイドル、身体障害者、知的障害者、貧困者、フリーター、ホームレス、ニート、引きこもりの平均値は理論的中点と比較して有意に低かった（ $t_s > 2.20$, $p_s < .05$ ）⁵⁾。

以上の結果から、富裕者、キャリアウーマン、政治家、役人、会社経営者は「知的能力は高いが冷たい」という両面価値知的ステレオタイプを持たれていることが示唆された。他方、「あたたかいは知的能力は低い」という両面価値的ステレオタイプを持たれている社会集団を確認することはできなかった。

集団間関係の認知と社会集団のイメージの関連 それぞれの社会集団に対する相対的地位の認知、協力—競争関係の認知の平均値について、理論的中点（3点）との間に有意な差があるかを検討するために、個人の回答を分析の単位として、t検定を実施した。その結果、富裕者、キャリアウーマン、政治家、役人、会社経営者、高齢者は理論的中点と比較して有意に高かった

($ts > 2.36$, $ps < .05$)。つまり相対的地位が高いと認知されていた。他方、グラビアアイドル、身体障害者、知的障害者、貧困者、フリーター、ホームレス、ニート、引きこもりは理論的中点と比較して有意に低かった ($ts > 2.71$, $ps < .01$)。つまり相対的地位が低いと認知されていた。協力-競争関係については、高齢者、主婦、グラビアアイドル、身体障害者、知的障害者は理論的中点と比較して有意に高かった ($ts > 2.44$, $ps < .05$)。つまり自分が含まれる集団と協力的な関係にあると認知していた。他方、富裕者、キャリアウーマン、政治家、役人、会社経営者は理論的中点と比較して有意に低い、または低い傾向が見られた ($ts > 1.73$, $ps < .10$)。つまり、自分が含まれる集団と競争的な関係にあると認知していた。

さらに集団間関係の認知と社会集団のイメージの関連を検討するために、社会集団を分析の単位として、相対的地位の認知、協力-競争関係の認知と、あたたかさ得点、知的能力得点と間の Kendall の順位相関係数を算出した。その結果、相対的地位の認知と知的能力の間に有意な正の相関が見られた ($\tau a(15) = .66$, $p < .001$)。内集団よりも地位が高いと認知している外集団に対して、知的能力が高いというイメージを持っていた。そして、協力-競争関係の認知とあたたかさの間に有意な正の相関が見られた ($\tau a(15) = .48$, $p < .05$)。内集団と協力的であると認知している外集団に対して、あたたかいというイメージを持っていた。この相関分析の結果は、SCM の予測と一致していた。

3. 研究2

(1) 目的

研究1に引き続き、研究2の目的は日本人大学生を対象に SCM が適用可能であるかを実証的に検討することである。

(2) 方法

調査対象者 一橋大学で心理学を受講している大学生 100 名 (男性 76 名、女性 24 名) を対象に質問紙調査を実施した⁶⁾。

実施時期 2009 年 12 月に実施した。

質問項目 社会集団のうち「役人」を「官僚」という言葉に入れ替えた点以外については、対象となる社会集団、質問項目、質問紙に含まれていた社会集団の種類などは研究1と同一であった⁷⁾。

手続き 授業時間の一部を使用して実施した。調査対象者には質問紙への回答に対して授業の成績に加点されることを説明した。回答時間は約 10 分であった。

(3) 結果

2次元から見た社会集団のイメージ 研究1と同様の分析を実施した。社会集団ごとに、個人の回答を分析の単位として、あたたかさと知的能力に関連する形容詞対の平均値を算出し、それぞれをあたたかさ得点、知的能力得点とした。加えて、それぞれの社会集団に対する相対的地位の認知、協力-競争関係の認知の平均値を算出した。その結果を表2に示した。

表2 あたたかさ得点、知的能力得点、相対的地位の認知、協力—競争関係の認知の平均値（標準偏差）

	あたたかさ 得点	t 検定	知的能力得点	t 検定	相対的地位	t 検定	協力—競争関係	t 検定
富裕者 ^{AB}	3.68 (0.75)	***	4.54 (0.80)	***	3.98 (0.80)	***	2.83 (0.97)	+
キャリアウーマン ^{AB}	3.77 (0.90)	*	5.29 (0.89)	***	3.73 (0.75)	***	3.04 (0.92)	
政治家 ^B	2.88 (0.96)	***	4.21 (1.19)		4.34 (0.82)	***	2.60 (0.90)	**
官僚 ^A	2.94 (0.90)	***	5.40 (1.00)	***	4.40 (0.78)	***	2.78 (1.02)	
会社経営者 ^A	3.91 (0.68)		5.24 (0.85)	***	4.04 (0.75)	***	2.98 (0.92)	
高齢者 ^{AB}	4.60 (0.95)	***	4.06 (0.73)		3.19 (1.01)	+	3.31 (1.02)	**
主婦 ^{AB}	4.80 (0.79)	***	3.93 (0.68)		2.90 (0.61)		3.54 (0.76)	***
グラビアアイドル ^B	4.25 (0.99)	+	2.93 (0.88)	***	2.74 (0.92)	+	3.40 (0.73)	***
身体障害者 ^B	3.94 (0.60)		3.83 (0.66)	+	2.60 (0.73)	***	3.18 (0.52)	*
知的障害者 ^A	3.55 (0.80)	***	3.27 (0.98)	***	2.40 (0.76)	***	3.24 (0.56)	**
貧困者 ^{AB}	3.73 (0.87)	**	3.44 (0.83)	***	2.25 (0.75)	***	2.94 (0.71)	
フリーター ^B	3.79 (0.98)		2.99 (0.94)	***	2.14 (0.83)	***	2.80 (0.78)	+
ホームレス ^B	3.07 (0.85)	***	2.95 (0.93)	***	1.78 (0.71)	***	2.94 (0.59)	
ニート ^A	3.37 (1.13)	***	2.99 (0.89)	***	1.92 (0.83)	***	2.90 (0.74)	
引きこもり ^A	2.93 (0.81)	***	3.33 (1.04)	***	2.04 (0.81)	***	2.98 (0.62)	

注1) あたたかさ得点、知的能力得点の範囲は1～7。得点が高いほど対象集団に対してあたたかい、知的能力得点が高いというイメージを持っていることを意味する。相対的地位の認知と協力—競争関係の認知の得点の範囲は1～5。得点が高いほど自分が含まれる集団よりも対象集団の方が地位が高い、自分が含まれる集団と対象集団との関係が協力的であると認知していることを意味する。

注2) 社会集団の脇に記してある記号は、社会集団が判断の対象として含まれていた質問紙のパターン。

注3) t検定は理論的中点からの差の有意性の検定。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$ 。

これらの社会集団に対するイメージが明確であるかを検討するために、理論的中点（4点）とそれぞれの社会集団のあたたかさ得点、知的能力得点の平均値の差についてt検定を実施した。その結果、あたたかさ得点については、高齢者、主婦、グラビアアイドルの平均値は理論的中点と比較して有意に高い、または高い傾向が見られた ($ts > 1.75$, $ps < .10$)。他方、富裕者、キャリアウーマン、政治家、官僚、知的障害者、貧困者、ホームレス、ニート、引きこもりの平均値は理論的中点と比較して有意に低かった ($ts > 2.55$, $ps < .05$)。知的能力得点については、富裕者、キャリアウーマン、官僚、会社経営者の平均値は理論的中点と比較して有意に高かった ($ts > 4.30$, $ps < .001$)。他方、グラビアアイドル、身体障害者、知的障害者、貧困者、フリーター、ホームレス、ニート、引きこもりの平均値は理論的中点と比較して有意に低い、または低い傾向が見られた ($ts > 1.79$, $ps < .10$)⁸⁾。

以上の結果から、富裕者、キャリアウーマン、官僚は「知的能力は高いが冷たい」、他方、グラビアアイドルは「あたたかいが知的能力は低い」という両面価値的ステレオタイプを持たれていることが示唆された。

集団間関係の認知と社会集団のイメージの関連 研究1と同様の分析を実施した。それぞれの社会集団に対する相対的地位の認知、協力—競争関係の認知の平均値について、理論的中点（3点）との間に有意な差があるかを検討するために、個人の回答を分析の単位として、t検定を実施した。その結果、富裕者、キャリアウーマン、政治家、官僚、会社経営者、高齢者は理論的中点と比較して有意に高い、または高い傾向が見られた ($ts > 1.87$, $ps < .10$)。つまり相対的地位が

高いと認知されていた。他方、グラビアアイドル、身体障害者、知的障害者、貧困者、フリーター、ホームレス、ニート、引きこもりは理論的中点と比較して有意に低い、または低い傾向が見られた ($t_s > 1.99$, $p_s < .10$)。つまり相対的地位が低いと認知されていた。協力-競争関係については、高齢者、主婦、グラビアアイドル、身体障害者、知的障害者は理論的中点と比較して有意に高かった ($t_s > 2.43$, $p_s < .05$)。つまり自分が含まれる集団と協力的な関係にあると認知していた。他方、富裕者、政治家、フリーターは理論的中点と比較して有意に低い、または低い傾向が見られた ($t_s > 1.74$, $p_s < .10$)。つまり、自分が含まれる集団と競争的な関係にあると認知していた。

さらに集団間関係の認知と社会集団のイメージの関連を検討するために、社会集団を分析の単位として、相対的地位の認知、協力-競争関係の認知と、あたたかさ得点、知的能力得点と間の Kendall の順位相関係数を算出した。その結果、相対的地位の認知と知的能力の間に有意な正の相関が見られた ($\tau_a(15) = .71$, $p < .001$)。内集団よりも地位が高いと認知している外集団に対して、知的能力が高いというイメージを持っていた。そして、協力-競争関係の認知とあたたかさの間に有意な正の相関が見られた ($\tau_a(15) = .57$, $p < .01$)。内集団と協力的であると認知している外集団に対して、あたたかいというイメージを持っていた。相関分析の結果は、研究1と同様であった。つまり SCM の予測と一致していた。

4. 総合考察

本研究の目的は、日本人大学生を対象に SCM が適用可能であるかを検討することであった。

研究1および研究2の結果から、日本人大学生を対象とした調査でも一部の社会集団に対して「知的能力は高いが冷たい」「あたたかいけれども知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプが持たれている可能性が示唆された。さらに内集団よりも地位が高いと認知する外集団に対して知的能力が高い、内集団と協力的な関係にあると認知する外集団に対してあたたかいというイメージを持っていた。以上の結果は SCM の議論や予測と一致するものであった。つまり Cuddy et al. (2009) の研究と同様に、日本人大学生に対しても SCM を適用することが可能であると言える。

他方で、本研究で対象となったいくつかの社会集団（たとえば知的障害者、貧困者、フリーター、ニート、ホームレス、引きこもり）については、あたたかさと知的能力のいずれの次元においても得点が低かった。つまりこれらの社会集団に対するステレオタイプは両面価値的ではなく、いずれの次元においても否定的なものであった。Fiske らの一連の研究 (Cuddy et al., 2009; Fiske et al., 2002) でも、2つの次元のいずれにおいても得点が低い社会集団、たとえば、ホームレス、福祉受給者、貧困者などが確認されていたが、本研究の結果からも、ステレオタイプの中には両面価値的なものではなく一面的な内容を持つものも多数存在することが確認された。

逆に、あたたかさと知的能力のいずれの次元においても得点が高い社会集団は見られなかった。この結果に関しては、研究1、研究2の調査対象者である大学生にとって、内集団となる社会集団（たとえば学生、日本人）や友好的な社会集団が対象として含まれていなかったことが原因であると推測される。

最後に本研究の問題点と今後の課題について指摘する。第一に、両面価値的ステレオタイプの存在を判断する基準の問題である。本研究では、それぞれの社会集団に対してあたたかさと知的

能力の2つの得点を算出し、一方の得点が理論的中点から有意に高く、一方の得点が理論的中点から有意に低いときに、その社会集団に対して両面価値的なステレオタイプを持っていると考えた。しかし、他者を肯定的に評価する傾向であるパーソン・ポジビティ・バイアス (Sears, 1983) という現象が存在することを考えると、理論的中点と、ある社会集団のあたたかさ得点または知的能力得点の平均値との差ではなく、心理的中点ともいうべき値との差を検討する方が適切であるかもしれない。第二に、内集団の問題である。本研究で実施した2つの研究の質問項目では、内集団を「自分が含まれていると考えられる集団」というようにあいまいなかたちで定義した。この場合、調査対象者が含まれると考えられる集団はさまざまであり、それが相対的地位、協力-競争関係の認知(回答)に影響を及ぼしている可能性も考えられる。今後の研究では、たとえば「大学生」というかたちで内集団を定義して調査をする必要があるだろう。第三に、相対的地位の認知の測定に関する問題である。本研究で実施した2つの研究の質問項目では、自分が含まれていると考えられる集団と比較して地位が高いかを判断してもらった。ただし地位が高いかどうかという判断に関しては、何を基準にして判断を求められているかが理解しづらく、そのために回答が難しい可能性も考えられる。今後の研究では、地位を容易に判断できるような質問項目を用意する必要があるだろう。第四に、本研究結果の妥当性の問題である。本研究では複数の社会集団のイメージを研究対象としたが、それ以外の社会集団(カテゴリー)に関する研究でもSCMが適用可能であるか検討する必要がある。さらに本研究は日本人大学生といっても日本のあるひとつの大学で実施した研究である。他大学のサンプル、大学生以外のサンプルを対象とした研究を実施する必要もあるだろう。

《註》

- 1) 本研究は、日本心理学会第78回大会および日本社会心理学会第53回大会にて発表されたデータを再分析し、加筆修正したものである。
- 2) 質問紙には留学生か否かをチェックできる項目がなかったために、研究1の結果には留学生のデータ1名が含まれている可能性がある。
- 3) 2種類の質問紙のうち、パターンAに回答した人は90名、パターンBに回答した人は88名であった。
- 4) Fiske et al. (2002) は、ある社会集団に対するあたたかさと知的能力の判断(得点)の平均値の間に有意差があれば、それは両面価値的なステレオタイプであると考えていた。しかしこの方法では2つの得点の平均値の間に有意差が見られるが、いずれの得点も理論的中点を下回る可能性もある。こうしたケースでは2つの得点の平均値の間に有意差が見られたとしても両面価値的なステレオタイプとは言えないと考えて、本研究では理論的中点(4点)とそれぞれの社会集団のあたたかさ得点、知的能力得点の平均値の間に有意差があるかを検討することにした。
- 5) 15の社会集団ごとに、個人の回答を分析の単位として、あたたかさ得点と知的能力得点の相関係数を算出した結果、役人、会社経営者、グラビアアイドル以外の社会集団では有意(有意傾向)な正の相関が確認された($r_s > .14$)。さらに社会集団を分析の単位として、あたたかさ得点と知的能力得点の間の順位相関係数を算出した結果、有意ではなかった($\tau_a(15) = .05$)。
- 6) 研究1と同様に、質問紙に留学生か否かをチェックできる項目がなかったために、研究2の結果には留学生3名のデータが含まれている可能性がある。
- 7) 2種類の質問紙のうち、パターンA、パターンBに回答した人はそれぞれ50名ずつであった。
- 8) 研究1と同様に15の社会集団ごとに、個人の回答を分析の単位として、あたたかさ得点と知的能力得点の相関係数を算出した結果、キャリアウーマン、グラビアアイドル、官僚、会社経営者以外の社会集団では有意な正の相関が確認された($r_s > .25$)。さらに社会集団を分析の単位として、あたたかさ得点と知的能力得点の間の順位相関係数を算出した結果、有意ではなかった($\tau_a(15) = .00$)であった。

《引用文献》

- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The Stereotype Content Model and the BIAS Map. In M. P. Zanna (Ed.) *Advances in experimental social psychology* (Vol. 40, pp. 61-149). New York: Academic Press.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., Kwan, V. S. Y., Glick, P., Demoulin, S., Leyens, J.-P., Bond, M. H., Croizet, J.-C., Ellemers, N., Sleebos, E., Htun, T. T., Kim, H.-J., Maio, G., Perry, J., Petkova, K., Todorov, V., Rodríguez-Bailón, R., Morales, E., Moya, M., Palacios, M., Smith, V., Perez, R., Vala, J., & Ziegler, R. (2009). Stereotype content model across cultures: Towards universal similarities and some differences. *British Journal of Social Psychology*, **48**, 1-33.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.
- Fiske, S. T., Xu, J., Cuddy, A. C., & Glick, P. (1999). (Dis) respecting versus (dis) liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, **55**, 473-489.
- 池上知子 (2008). 内集団地位への脅威と相補的ステレオタイプ効果——システム正当化動機は内集団高揚動機を凌駕するか—— 日本心理学会第72回大会発表論文集, 105.
- 栗田季佳・楠見孝 (2012). 障害者に対する両面価値的態度の構造——能力・人柄に関する潜在的—顕在的ステレオタイプ—— 特殊教育学研究, **49**, 481-492.
- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収・高林久美子 (2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(1)——愛国心、ナショナリズム尺度の検討—— 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 64-65.
- 沼崎誠 (2010). 死すべき運命の顕現化が日本人男子大学生の性役割的偏見に及ぼす効果 人文学報, **425**, 15-30.
- Sears, D. O. (1983). The person-positivity bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 233-240.
- 高林久美子 (2007). 自己への脅威が女性に対する偏見に及ぼす効果：両面価値的性差別理論からの検討 社会心理学研究, **23**, 119-129.